1955　昭和３０年５月１０日発行　　鶴研
雑誌　平凡スタア･グラフ　　５月号　　６頁

華やかなる幻想のかげに

純愛に涙する鶴田浩二哀感の譜！

姫路城下に落日せまり、君と語りしあの思い出も今は空しく……、
多感な少年の夢破らるる！

歎きの美少年

（おう、冷たい。ブ、ル、ル、ル……）鶴田の栄一少年は、助監督が如露の水で高いところからジャア、ジャアかける人工雨を頭からかぶって、ブルブルふるえた。それは白虎隊映画『会津の娘たち』の撮影のときで、飯盛山にこもった白虎隊の美少年たちが、つぎつぎに戦死していく場面。栄一は十六歳の家老の息子で、身に十数ヵ所の傷をうけ、本郷秀雄の家来に背負われながら、死んでいくという役である。

「がまんしてろよ。ほんのちょっとの間だから」監督はいうのだが、なんせ厳冬二月のことで、太秦の裏山の崖には氷柱が列をなすほどのひどさ。しかも剣道衣一枚のうす着なので骨の髄までズキズキする。だが負けぬ気性の栄一はがんばった。（なにくそっ、このくらい……平気だぞ）唇を紫にしながら歯を食いしばって難行をつづける。そのムリが祟ってか、夜になるとひどく発熱、風邪がこじれてジフテリヤになってしまった。彼はあくる日、加茂川べりの京都府立病院に入院した。それも隔離病室である。二ヵ月あまりの病院生活は、少年鶴田に思索と熟慮のチャンスをあたえた。ガラーンとした病室で、高い漆喰の天井をみつめていると、なによりも、あの入門当時のことがおもい出される。

栄一は浜松生まれ。土地の新祥小学校を出たとき、父が大阪の航空工廠に転勤になったので、母親とともに大阪にうつり、旭区大宮町に住んでいた。たまたま叔父が彼の美貌を見込んで映画入りを持ちかけたのだ。「なるよ。チャンバラの俳優になるんだ。そして捕手を斬りまくるんだ」当の栄一が乗気になった。云いだしたら後へ退かない子供なので父は黙認母もついその気になって、叔父が木曽十三郎と知りあいなのを幸い、同氏にたのみこんだ。木曽はその頃、浩吉のマネージャーをしていた。そこで本人をつれて行くことになった。「高田浩吉？　知ってるとも。芸がうまいね、ボク、好太郎よりずっと好きだ」

腕白坊主で親の目をかすめて、時時、映画館をのぞいていた栄一は、浩吉の水ぎわ立った殺陣ぶりまで知っていた。その栄一が母につれられて浩吉の門を叩いたのは十二歳のとき。浩吉はひと目みて、この子は延びると見抜いたのだった。子役とはいえ、むかしの浩吉とおなじで、お茶をくんだり、使い走りをしたり、後かたずけをしたり師匠の家にかえれば、あれこれの雑用、いわば給仕兼書生である。映画に出たのは『雨ふり峠』がさいしょで、何本目かの後『会津の娘たち』に出て、この災難をうけたのである――。

退院まじかになって主治医の若い博士が回診のときこう云った。

「いよいよ君も退院だね。また撮影所へかえるの？」「さア、どうしようかと思っているんです」博士は栄一の心の奥を覗きこむように、「これからの俳優はね、顔や芸だけではいか

んよ。教養を根底にした演技でなくてはね……幸い君は年も若いんだから、然るべき、学校にはいって教育を身につけたらよいと思う。学問は、大切だよ」「は、はい、ありがとうございます」栄一は胸がじいんと鳴るようだった。

彼はかんがえた。（そうだ、父に云って学校へやってもらおう。映画はそれからでいいんだ）そこで彼は、恩師の高田に諒解をもとめると、その足で大阪の家に舞いもどり、此花商業に入学した。実業家になるつもりだったのである。

硬軟二刀流

南洲翁に傾倒していた栄一は此花商業にはいるやたちまち硬派の大将になった。正義感の爆発からよく喧嘩をやった。ほとんど負けたことがない。今春選抜大会で優勝した浪花商業や尼ケ崎中学の連中と渡りあって、腕っぷしのよさを示した。それでいて一抹の哀愁をふくむ美貌は女の子に好かれてよくラヴレターを頂戴した。つまり硬軟二刀流の使い手だったのだ。

冬休みに故郷の浜松にかえった栄一は小倉の制服に朴歯の足駄というゴツい姿でレター組の土地の女学生をつれて映画館にはいり、ノホホンと納まりかえっていた。そこまでは無難だったが、得意然と夕風を切って町をのし歩いたのがいけなかった。土地で顔を利かせるアンチャンたちがそれを見つけた。（チンピラのくせに生意気な奴だ。のしてやろう）彼が大阪がえりと、うすうす知っているだけに土地の女学生と肩をならべて歩いているのが癪にさわったのだろう。一人がツカツカ寄って来て詰った。

「おい、浜松へ来て、あんまりデカい顔するなよ」栄一は、ムッとなった。

「なんだと天下の公道だ。だれと歩いていようと自由じゃないか」その言葉が、さらにアンチャンたちを、刺激したらしい。

「なんだと？　口幅ったいこと云いやがる。原っぱへ来い。話をつけよう」二人だけと思ったら、凄いのが四五人、バラバラッと集まって来た。女の手前、いまさら後へ退けない。此花商業三年生の彼は、卓球の大将だった上に、柔道もなかなか強かった。キッと身がまえるとデカいのが踊りかかって来た。「なにおっ、こんなのッ」タカをくくった彼は、そいつの利腕をつかんで、咄嗟に鮮かな背負い投げ――相手の巨体が、すってんどうともんどり打って地面にめりこんだ。そこまではあっぱれだったが、何せ相手は五、六人、ドッと一時にかかって来てまるで棒倒しでもするかのように、栄一の体は押し倒された。その上、手足をひっぱられて、ワッショ、ワッショと胴上げの形のまま、川岸に運ばれた。

（いかん、やられるぞ）彼等の頭上でバタバタやったがダメ、エイヤッとかけ声もろとも水深一メートル余の馬込川へほおりこまれてしまった。まるで野良犬でも捨てられたような恰好だった。

「ざまァみろ。あんまりほてるからこんな目をみるんだ。川ん中で涼んでろ」

「ワッハッハッ、奴さん、寒中水泳をやってらァ」囃し立てながら小石までぶっつけて来る。冗談じゃない。寒中水泳どころか一月の寒中だ。冷めたいの、なんの、栄一は凍えるような水中でもがいた末、夕闇にまぎれてやっと下流から這いあがると、そのままスタコラ逃げだした。全身ぐしょぬれ、玉の顔(かんばせ)も泥んこになってまことにあさましい姿

である。顔の泥を拭きながら、そこらを見わたしたがどこにもいない。おかげでせっかくの女学生までそれっきりになってしまった。

わが恋は哀し！

彼が虹のような初恋にやぶれて悶悶の日を重ねたのは、それから二年後十八歳のときである。硬派の暴れん坊だった彼が成績のよかろうはずがない。卓球部主将という肩書のおかげでどうやら此花商業を卒業させてもらったが、関西大学の入学試験をうけて見事に落第。浪人の悲しさは、やむなく夜間の予備校にかよって、昼間はアルバイトの意味で先輩のいる高島屋商事の事務員となった。父親が浅野工業の工務課長として浜松にもどっていたためでもあった。高島屋ではまじめに働いた。仕事は外地へおくる商品の積みだし係りである。

彼の初恋の女性、司ふじ子とむすびつけたものはピンポンだった。高島屋商事の厚生部にはピンポン台がいくつもあって、昼時になると、デパートの売子や商事の課長級まで出て来て夢中に白球を飛ばしている。栄一の足も、しぜんにそこに向っていく。むりもない此花商業の大将で神宮大会に出たほどの腕前の彼には素人ピンポンにかえって興を惹かれる。かれは、二、三日にやにやしながら見物していたが、とうとう先輩の郷原に引っ張りだされた。「おい、小野、一つやってみろ」「だめだよ、しばらくやらんものね」店のお歴歴を前に、発送係にすぎない小野栄一は、いささかはにかみながら、「ちょっと、入れていただけませんか」と云って出た。「どうぞ、遠慮なく」関大出だという上役は事もなげにうなずく。栄一はラケットをにぎる構えからして違う。

（おやッうまいかもしれんぞ）だが大したことはあるまいと平然と相手になった。ところがどうして小野は鮮かな球さばきで、アッというまに軽くひねってしまった。お次も一蹴され、そのお次も零敗だ。周りからざわめきが起りだした。

「強いなア。あれはだれだい」「発送係りの小野とかいう新入りだよ」「えっ、小野っ、じゃア、あの此花商業の大将じゃないか」目を瞠った上役に郷原が説明してやった。

「そうですよ。四年間主将をやっていたんです。本気にやればもっと凄いですよ」

みんな、道理でといった顔つき。尻ごみしてつづく者がない。そのとき、すっすっとフエルト草履の音がして、二十二、三歳のとても品のよい女性がはいって来た。「楽しそうね。私にもやらせて」何も知らずに飛びこんで来て、事もあろうに栄一の相手に立った。「司さん、強敵ですぞ」いわれて女性はポッと頬を赤らめた。強敵といわれてちょっとみた栄一の水ぎわ立った男性美に、心を惹かれたのだろう。「どうぞ、お手やわらかに……」彼女は慎ましやかに笑ってラケットをもつ。その気高さがこんどは思春期の栄一の胸を微かに慄わせた。（なんて上品な人だろう。まるで女神みたいだ）

かれは手心をして球をおくった。わざと失策してやると周囲からパチパチおこる拍手。「お上手ですね、よほどやったんでしょう」「いえ、女学校時代、ちょと……おはずかしいですわ」てれてうつむく姿が格別だった。十八歳の栄一はポーッとなって、どうして敗けてやろうかと、球のあしらいに、気兼ねする始末だった。

夕方、同宿している下宿にかえる途中、栄一が郷原に訊いた。「今日、ピンポンをやった

娘さん、何をしてるんだね」郷原は横浜生れでカラッとした性格なので、栄一とはよく気が合った。訊かれて郷原がにやりとしたのは多大の関心をもっていたものとみえる。彼は淀みなくこたえた。「うん、あの人は司ふじ子といってね、店の訓練部にいるんだ」「訓練部？　どんなことやるの」「行儀作法の先生みたいな役さ。女店員の躾や百貨店用語をおしえるんだ。どうだ。優秀だろう」「年は二十二歳、君より四つ年上だ。山陽線の網干の人でね。高島屋に四、五年も勤めている模範店員さ。ぼくとはとても懇意だからそのうち紹介してやろう」まるで恋人（スイート・ハート）ででもあるかのような口吻（くちぶり）。さては郷原め、散歩ぐらいしたことがあるのかと、妬まずにはいられなかった。

ある日、郷原がはずんだ声で云った。「おい、小野、今日こそ紹介するぞ。彼女とお汁粉食べに行く約束したんだから」栄一は胸の中で手を叩いた。彼女とつれ立って道頓堀の雁次郎横丁へいったのだが、腰かけていても郷原とばかり親しそうに話をして一向こっちの存在をみとめてはくれない。焦れったいが初会だし、止むをえないと思った。

栄一はおとなしく次のチャンスを待った。だが郷原はその後、一向会わせてくれない。顔がみられる唯一の場所は社員食堂だ。彼女とうまく合うような場所に陣どるのだが、さっぱりこっちを向いてはくれない。さらばと先に立って通路の廊下でまっている。遠くからふじ子の姿があらわれる。胸かときめいて、すねが硬ばるようだ。（今度こそ何かが起るだろう。話しかけられたら何といおうか）すばらしいことを期待するのだが近づく彼女は真正面を向いてスーッと行きすぎる、無関心な態度だ。

それでも栄一は、あきらめない。彼女の住居が住吉公園近くの粉浜と知って、先廻りして駅で待ってみた。（ああ、来た。今日こそ）新らしい局面の転回をまつのだがどうだろう。四、五十分もまって、やっと降りて来たふじ子は、青白い街燈のもとにふらつく哀れな栄一に、チラッと冷めたい一瞥をおくったまま、白孔雀のようなスカートをひるがえしてさっさといってしまう。（ああ、またダメか！）彼は打ちのめされたような気持で、すごすご引きかえさねばならなかった。そんなにすげなくされても、夜ごとに彼女の夢をみた。

初心な栄一は、ただ心でおもうだけで、それを表現する術を知らなかった。反応らしいものは針の先ほどもみられないが、しかし、あこがれの女性とおなじ職場で働くということが、なによりもうれしく、いつまでも高島屋に勤めたい気持になっていた。

ところが、そのふじ子が、とつぜん高島屋をやめて国の岡山へかえることになった。おなじ思いを寄せている郷原がいうのだ。「え、ほんとうか。担ぐんじゃないか……」栄一はおどろいて訊きなおす。「ほんとうだとも、結婚するんだってさ。明日の朝八時に大阪駅を発つそうだ。見おくりにいこうや」真実と知って、がっくりしてしまった。彼は翌日、店をサボって郷原と二人で見おくりにいった。青春の感傷が、ふたりの心をやたらに苛立たせる。水泡のようなはかない恋ともこれでおさらばか……悶悶の栄一はいつもの金ボタンの学生服だった。栄一がおろおろしている間に、郷原は列車の窓ぎわでしきりに話している。電鈴が鳴って汽車がしずかに動きだしたとき、栄一はかねて用意のラヴレターを丸めて、「さようなら、司さん、さいごの握手！」云いざま、握手にかこつけて、それをそっと彼女の手ににぎらせた。哀れな策戦が成功したのである。

網干の落日

（もう会えない……僕の虹もとうとう消えてしまった！）置き去りにされた思いであきらめていると、三、四日たって、ふじ子から分厚の手紙がとどいた。栄一はおどりあがって封を切った。こう書いてある――。

『小野さん、許して下さいね。私あなたを愛していたの。好きだっただけに、意識してあなたを避けていたのです。何故？　もし親しくなったら離れる自信がもてなかったからです。ですから、お別れのときも何も書かずに黙って送って下さったらどんなにかよかったのに！　あなたのお心を知って、私汽車の中で、泣けて泣けて……

もう一度だけ、あなたとお目にかかってしみじみお話したい。どうか×日の×時に汽車でつくように姫路までおいで下さい』

としてあるではないか。栄一は狂気して姫路まで出かけていった。四時間かかって姫路についたのはお昼頃、地味な紺の服のふじ子が、ホームに待っていた。まことにいい機会である、だが純真一方の栄一は、艶のある言葉一つ発するわけでもなく、ただ彼女と肩をならべたまま黙黙として白鷺城下のお濠端を歩いた。

「静かな所へいかない？　海岸はどう」女にいわれて、バスに乗って人目を離れた網干の海岸へいった。ちょうど秋の夕暮で、真紅の落日が、ゆらゆらしながら遠い山に落ちようとしているときだった。「まあ、きれい！　あの夕日の美しさも、私達みたいに、やがて落ちて闇に包まれてしまうんだわ」ある意味をふくませて女はいうのだが、十八歳の栄一にはそれが通じなかった。「寒い！ゾクゾクして来た」栄一は肩をすぼめた。そうだろう、十月末だというのに、彼はオーバなしの学生服だったのだ。暗くなってから、ふたりは起ちあがった。唇をもとめるでもなく、抱擁一つするでなく、ふたりは石ころをふんで浜から道路へ、そしてバスに乗ってふたたび姫路へ。

バスに揺られるたび、栄一は空腹をひとしおきつく感じた。むりもない、帰りの汽車賃を残しただけで、かれは昼の汽車弁さえ食べていなかったのである。「司さん、ぼく、お腹がペコペコなんです。うどんでも食べる店はないかしらん」謎をかけると、ふじ子は彼を駅のまえの小さな食堂につれていった。天丼が二つ運ばれた。もちろん、ふじ子のおごりである。すき腹のかれは、たちまちペロリと一つを平らげた。色気もなにもあったものではない。「小野さん、これもいかが？　私、お腹がいっぱいなのよ。ね、召しあがって」いわれて彼は、ほんとに召しあがってしまった。虹の恋も食慾には勝てなかったのだ。「結婚も迫ってますし、もうお会いはできませんわ、小野さん、お元気にね」汽車の窓ごしに握手をかわして、栄一は夜汽車で大阪へかえって来た。彼女とはそれっきりである。栄一にとっては、ふじ子のいない高島屋が空家みたいに味気ないものになってしまった。

大阪の彼へは、もう手紙一つ来なかった。唯一の愛の手紙は彼が兵隊にいくとき、行李の底に秘めて浜松の実家におくったが、昭和二十年の空襲のとき惜しくも焼けてしまった。（あのひとくれの灰のように情ない恋だった。あの人、いま頃どうしてるだろう）兵舎の窓から星を仰いで栄一は、いくど網干の海を思いだしたことだろう。横須賀で海軍の特攻隊にはいり、海の藻屑と消ゆる日をまつうちに痛ましい終戦だ。失恋の身にふりかかるあの敗戦のみじめさは、あたら男一匹の魂をめちゃめちゃにしてしまった。いわゆる特攻く

ずれのうらぶれの身を浜松の実家によせているうち、偶然、巡業に来た昔の恩師高田浩吉をたよって一座に加えてもらうことになった。これが映画入りの発端ともなったわけである。

昭和二十三年、恩師高田浩吉の推薦によって松竹下加茂映画に迎えられた。この時から栄一の名も鶴田浩二と改め、今はスタアになる日は約束されたかのように夢みるのであった。しかし現実の風はあまりにも冷たくきびしかった。与えられる役とてもなく、唯いたずらに樵慮の日日を送る栄一は、次第に希望を見失う心地さえするのであった。その栄一をいつもはげまし叱咤するのは、恩師高田浩吉である。「栄一、昔お母さんにつれられてわたしのところに来た日のことを覚えているかい。あの頃の栄一はもっと強かった、そんなことで俳優がやっていけると思うのか、不心得なやつだ！」栄一を叱る浩吉の眼にはいつか涙が光っていた。「くれぐれもお願いします。我儘なものでございますが、どうか先生の手できつくお躾け下さいますよう……」栄一は瞼をとじると、その時の母の姿がまざまざと浮んで来るのであった。「そうだ俺は間違っていた、スタアになろうだなんて大それた馬鹿なことを夢みていたものだ。大部屋へ入ってやり直そう、まず演技だ芝居も満足にできないのに何がスタアだ」奮起した栄一の努力はめざましかった。その年の暮、念願かなって大曾根辰夫監督の「遊侠の群れ」に端役ではあるが出演がきまった。そのキャストは栄一の前途を暗示するかのように、長谷川一夫、高田浩吉等という大顔合せの作品であった。

栄一の真剣さを見込み、これは物になると感じた大曽根監督は、続いて「フランチェスカの鐘」の主演を与えた。このシナリオを手にした栄一は、畳に手をついて、はるか大曽根監督の住むという家に向かい深く深く頭を下げた。いまでもその時の心境を語る時、涙をたたえて、人一倍恩義を感ずる鶴田浩二は、「我儘な僕を、ここまで育ててくれた大曽根先生の恩は一生忘れられません」としみじみ語っている。

それからのけんらんの彼の歩みは世間がよく知っているだろう。いま鶴田浩二は、銀幕に咲きほこっている。招かずして天下の美女に慕いよられる身でもある。しかも彼の胸の奥底にただ一つのこされたやるせない、あの初恋の花はいまだに美しく生きている。三年ばかり前のことだ。多くのファン・レターのなかから、彼は意外な手紙を見出した。それは苗字こそちがえ、十年前のあのふじ子からではなかったか！　忘れもしない美しい筆蹟で、その後のことが書いてあった。女の子が一人できて、つつがない生活をおくっているが、あの頃をおもいだすとたまらなくなつかしい、あなたの映画をみて、せめてもの心慰めにしている、という意味のことが書いてあった。

（ああ、忘れずにいてくれたか！）

いまなお、純情多感な鶴田浩二の双眼は、いつか涙に潤んで来るのだった。

（おわり）